

萩

Vol 4

ものがたり

萩まちじゅう博物館

西山徳明







文化遺産専門解説員による解説  
(種原家の石垣、表紙は宇佐川家の土堀)

シリーズ

萩

ものがたり ④

# 萩まちじゅう博物館

西山徳明

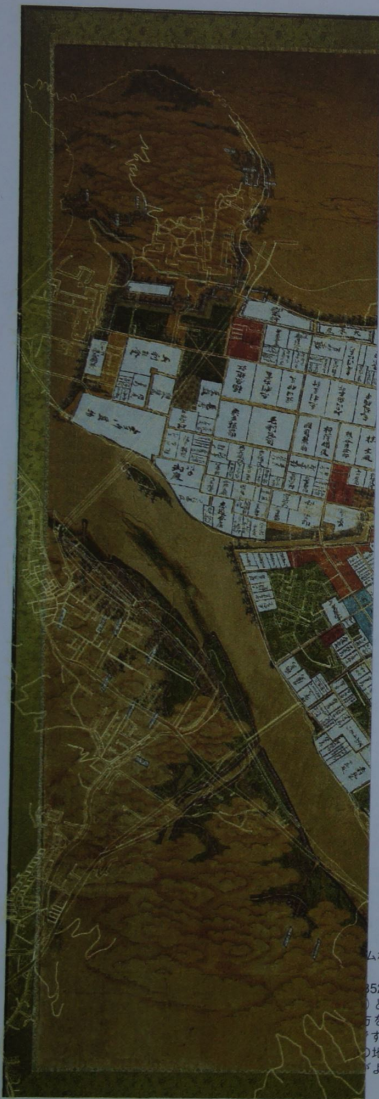
TRC102077

75044MS



## 目次

序 「萩まちじゅう博物館」という試み……	3
本書の読み方……	4
第一章 城下町から都市遺産へ……	5
1 「都市遺産・萩」……	5
2 萩・城下町の形成……	6
3 都市が遺産になるプロセス……	8
第二章 体験「萩まちじゅう博物館」……	11
1 市民による「まち博」ゲスト体験……	12
2 市民による「まち博」ホスト体験……	21
3 観光客の「まち博」体験……	28
第三章 ファイールドミュージアムと「萩まちじゅう博物館」……	32
1 エコミュージアムの理念と仕組み……	32
2 欧州のエコミュージアム……	34
3 ファイールドミュージアムの考え方……	42
第四章 「萩まちじゅう博物館」の仕組み……	46
「萩まちじゅう博物館」システム・マネジメント構想……	53
あとがき……	59
用語解説……	61



株式会社

1952年の萩城  
と現在の地形  
を地形図に合  
す。  
の地図がそのま  
よくわかりま





■「萩城下町・今昔絵図」  
 (作図 山口葎洋システム株式会社)

この絵は、嘉永5年(1852年)の萩城下町絵図(大津友一氏所蔵)と現在の地形図を重ねた上で、絵図の方を地形図に合わせて画像修正したものです。萩のまちが「江戸時代の地図がそのまま使える町」であることがよくわかります。

1	市民による「まち博」ゲスト体験	12
2	市民による「まち博」ホスト体験	21
3	観光客の「まち博」体験	28

用語解説

あとがき



# 序 「萩まちじゅう博物館」という試み

「維新胎動の地」「萩焼」「城下町・萩」「土塀と夏みかん」、そして「江戸時代の地図がそのまま使えるまち」と、萩を語る枕詞にはこと欠かない。太平洋岸、瀬戸内ラインの諸都市で先行した近代

■萩・川内 景観要素分布図  
(作成 九州大学都市環境設計研究室)

この図は、2004年現在の川内に残存する歴史的な景観要素の分布を示しています。この分布図から、地区内全体にわたり近世からの道筋や幅員を継承する歴史的街路が数多く残存しており、それら街路に沿っておびただしい数の伝統的な町家建築が、また武家屋敷跡には長屋門や門、土塀、生垣あるいはその基礎石が敷地境に密度高く残されていることがわかります。さらにそれらが画する街区には、寺社建築や屋敷建築、巨木・樹林、果樹・菜園といった歴史的な景観要素が、近世からのそれぞれの町の歴史をそのまま物語るように分布しています。





## 序 「萩まちじゅう博物館」という試み

「維新胎動の地」「萩焼」「城下町・萩」「土堀」と夏みかん、そして「江戸時代の地図がそのまま見えるまち」と、萩を語る枕詞にはこと欠かない。太平洋岸、瀬戸内ラインの諸都市で先行した近代化の怒濤のなか、幕末の山口移鎮を境にして、どうやら萩には別の時間が刻まれはじめたようである。そこでは近世由来の都市文化がゆつくりと醸成し、今日において豊かな薫りを放っている。

こうした都市文化を育む萩市では、二〇〇四年秋の開府四百年を契機とし、「萩まちじゅう博物館」というまちづくりが動き始めている。市域全体を屋根のない博物館と見なして、市民と行政が一体となった博物館活動を展開し、有形・無形の遺産を再発見、ありのままに現地で展示し分かりやすく解説しながら、同時にそれらを根拠にした新たな文化活動の創造や地域の景観づくりをめざそうとする壮大な取り組みである。

めざす先には萩市の観光再興もみえてくる。固有の文化が光を放ち、その輝きに導かれた人々が遠来から訪れ集うことは都市本来の姿であろう。市民があるじとなって場をしつらえ、客を招き交流する、そうした「萩まちじゅう博物館」という試みを解説する本書がその一助となれば、これにまさる喜びはない。

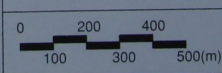


凡 例

- |              |         |
|--------------|---------|
| ■ 屋敷型建造物     | — 基礎石   |
| ■ 町家型建造物     | — 生垣    |
| ■ 寺社型建造物     | — レンガ塀  |
| ■ 洋風建造物      | — 水路石垣  |
| ■ 長屋門        | ■ 祠     |
| ■ 長屋         | ■ 鳥居    |
| ■ 墓地         | ■ 石碑    |
| ■ 庭園・樹林地・蜜柑畑 | ■ 石橋    |
| ■ 水面         | ■ 石階段   |
| ● 樹木         | ■ 門     |
| — 土堀（漆喰）     | □ 石柱門   |
| — 土堀（荒壁）     | ● 水場    |
| — 土堀（その他）    | ● 井戸    |
| — 板塀         | ● 煙突    |
| — 玉垣         | — 地区境界線 |
| — 石垣         |         |

■ 萩・川内 景観要素分布図  
（作成 九州大学都市環境設計研究室）

この図は、2004年現在の川内に残存する歴史的な景観要素の分布を示しています。この分布図から、地区内全体にわたり近世からの道筋や幅員を継承する歴史的街路が数多く残存しており、それら街路に沿っておびただしい数の伝統的な町家建築が、また武家屋敷跡には長屋門や門、土堀、生垣あるいはその基礎石が敷地境に密度高く残されていることがわかります。さらにそれらが画する街区内には、寺社建築や屋敷建築、巨木・樹林、果樹・菜園といった歴史的な景観要素が、近世からのそれぞれの町の歴史をそのまま物語るように分布しています。





## 本書の読み方

本書を読んで頂くに当たり、次のような読み方をお勧めしたい。

まず一章は、萩という不思議な運命をたどってきた都市が、今日において希有な都市遺産となり継承されている理由について、私なりの解明を試みているもので、どなたにも読んで頂きたい内容である。

この都市遺産の考え方を萩のまちづくりのヒントとしようというのが「萩まちじゅう博物館」である。この取り組みが、萩にどのような将来像を与えるか、現状をふまえつつ空想的に記述したのが二章である。市民の方々や一般の方には引き続き読んで頂きたい本書の中心部分である。

一方で、この斬新な「萩まちじゅう博物館」のまちづくり手法としての枠組みをいち早く理解したいという方には、先に四章を読んで頂く方がよいだろう。「萩まちじゅう博物館」構想の全体システムを体系的に整理している。

三章は、「萩まちじゅう博物館」構想のもととなるエコミュージアムを、二〇〇三年秋にそのルーツである欧州に訪ねた際の視察記録である。国や地域により多様なエコミュージアムの理念や実状を知ることが、これからの「萩まちじゅう博物館」を進めるうえで大いに参考になると考える。

最後に、本書は前例のない「萩まちじゅう博物館」という取り組みの計画書的な性質を持つ。そのためには新たな概念を多彩に取り入れて行く必要があるが、様々な聞き慣れない用語を使うことを避けられなかった。これら用語については、本文中でもできる限り詳細に解説するよう努めたが、できれば文末に示す用語解説をあらかじめお読み頂くか、文中の(※)の番号を用語解説と参照しながら読み進んで頂くとうれしい。

## 一章 城下町から都市遺産へ

今日の萩が放つ都市文化の薫りを理解するため、「萩は現代に生きる都市遺産である」ということを考えてみた。萩のまちは、発掘された古代遺跡のように、意図せず残り、予期せず発見され、否応なく授けられた遺産ではない。そこには、人々が日々の営みの中で萩という都市を遺産としてかたちづくってきた次のような経緯があった。

### 1 「都市遺産・萩」

萩のまちを歩いていて、「遺産」とはこういうものかと思うときがある。観光客の人混みを少し避け、寺院と町家が建ち並ぶ古萩や小規模な武家屋敷と田畑が混在する土原、江向などの裏通りに紛れ込み、車の行き来もまばらな道の彼方を見通すときである。

迷い込んだ広くも狭くもない真っ直ぐな道は、百メートルも歩くと必ず次の道と交わる。その交差点ごとに立ち止まって左右を見通すと、町家に施された様々な板壁や漆喰壁、寺院や屋敷の土塀、





嘉永5年(1852)の城下町絵図



慶安5年(1652)の城下町絵図

慶長九年(一六〇四)、毛利輝元は山口や防府・桑山といった他のいくつかの候補地の中から萩の河口デルタを選び、城下町の建設を始める。しかし当時は内部に湿地や沼地が多く残存し、指月山の陸繋化も不完全であったという。これより数多の洪水と闘いながら、安政二年(一八五五)に姥倉運河と河添の開削工事が完了するまで、実に二百五十年の歳月をかけデルタの形をほぼ今日と変わらぬ姿に整えた。都市遺産・萩の原型の完成であった。

面積約十五万平方メートルの「川内」と呼ばれる河口デルタは、近世初頭に一つの都市を築くにはもともと広すぎる土地であった。築城後約五十年に当たる慶安五年(一六五二)の城下町絵図をみると、指月山の麓の本丸から三の丸にいたる城郭を外界と画す外堀までは完成しているが、デルタ中央部や南西部、南東部の畑や湿地に接する町人地と侍屋敷の町割りは不確定である。

その後、貞享四年(一六八七)に新堀川が開削されることでその北部の町人地や寺町の治水が安定するとともに、それらを南部と隔てる結果が明確となり、市街地に成熟の条件が整うこととなる。残されたデルタの南半分の治水のためには、延享元年(一七四四)に現在の藍揚川が開削され、湿地を治



「菊屋横町」の町並み



堀内の町並み

生垣が数百メートルの奥行きに見えなくなるまで見事に整えられ続けている。まさに幕末の志士たちも見たであろう風景が繰り返し繰り返し眼前に現れるのである。これは戦後日本の至る所で破壊され続けてきた、近世城下町の風景そのものである。全国一三〇以上の地に建設された近世城下町は、ある一定の空間構成を共有しながらも、それぞれの風土や立地を巧みに読みとり、個々にユニークな姿を創り出した。萩もまた他にない特別な姿の城下町であったろうが、これを遺産としてみるとき、他と比して何が勝っているか、どこが異なっているかを探しても無益に思える。

むしろ都市の完成後、このまちの人々が、あたかも萩城下町の姿を必死に堅持しようとするかのごとく、他都市と異なる選択をし続けてきた以下のような事実の中に、かけがえのない「都市遺産」である証拠を見ることができよう。

## 2 萩・城下町の形成

それでもまずは都市建設の始まりを見ておきたい。





武家屋敷の名残を留める簡素な住宅



漆喰のはげかけた土塀と夏みかん畑



人工河川が城下町の形成に役割を担った



三角州に築かれた城下町・萩(田床山より)

めながら田や畑を営みつつ新堀川内の城下町に続く町人地や侍屋敷を配置することで土地利用を固めていった。

### 3 都市が遺産になるプロセス

このように、萩デルタという広大な空間と三方を水に囲まれた地勢を都市建設に巧みに取り込んだことで、今日なお拡幅を要しないゆとりある道路の敷設や、百姓地や農地、湿地を内包する土地利用が可能となり、自然の豊かな環境が形成された。大きな敷地を必要とする役所や市民ホール、運動公園といった公共施設は都市の近代化に欠かせないものであるが、多くの都市ではこれらの用地に城跡や堀の埋立地を当てたため、その景観は一変した。しかし萩では、これら施設を近世から内包する農地や未利用湿地に建設できたため、城下町の都市構造を変化させることはなかった。

城下町の構造を維持できたもう一つの大きな要因がある。大正十四年に山陰線長門三隅～東萩間の全線が開通するが、その際、他都市のように中心部に鉄道駅を造らず、大きくデルタの南を迂回させたことである。もし鉄道駅

が川内に造られていたとすれば、起こったはずの駅を中心とする開発や、わずか幅十～二十メートルとはいえ空間を強く分離する鉄道敷が、明快な城下町の構造にはなかった都市の表裏をつくり出していたに違いない。

そして夏みかんの話を忘れるわけにはいかない。「夏みかん」は「城下町」や「明治維新」と並ぶ萩の代名詞である。しかし夏みかんの景色は藩政期からのものではなく、旧萩藩士小幡高政が、山口移鎮につく秩禄処分で禄を失った土族授産のため、明治十年頃から経済栽培を奨励して定着したものである。

重臣が去った広大な武家屋敷は、土地にせよ建物にせよ親近者や留守居がただ維持することは困難であった。門や長屋門、土塀と生活に必要な建家のみを残し、他の家屋を倒して畑を整え、夏みかんの苗を植えていった。明治二十年頃には摘果もはじまり、主を失った旧城下の武家屋敷はたわわに実る夏みかんで溢れかえったという。

瑞々しいダイダイ色の果実とは対照的に、手が入ることもなくなった土塀は瓦や漆喰が自然に崩れ落ち、土の落ちた石垣に生垣が植えられた。今も堀内のまちを歩くと、寂れた土塀や生垣越しに、古瓦を載せた平屋の端正な建





「萩博物館」完成予想図

## 二章 体験「萩まちじゅう博物館」

「萩<sup>※</sup>まちじゅう博物館」は、二〇〇四年十一月十一日の萩開府四百年を記念する「萩博物館」の開館と同時に「開館」する。これは、コア（＝核）博物館となる「萩博物館」が堀内地区に開館することで、萩市全域をフィールド（＝展示室）とする「萩まちじゅう博物館」というまちづくりの最初の歯車が回転し始めることを意味する。

そこでは一体どのようなまちづくりや訪問客との交流が展開するのか、少し先回りして見てみることにしたい。ただし、ここに書くのは「萩まちじゅう博物館」に託す筆者の思いであり空想であって、誰かが実現を保証している内容ではない。むしろ「萩まちじゅう博物館」は、こうした将来の都市像を希望する市民が一人、また一人と増え続けていくことによって、初めて形を成す取り組みである、と言った方が適切かもしれない。



松の巨木が立ち並び橋本川河畔



武家地の名残を示す長屋建築

物が見え隠れする。それらは取り壊しを免れた藩政期の武家屋敷の一部か、あるいは夏みかんとともに暮らしてきた明治、大正期の簡素な住宅建築であり、その景色はまさに萩のまちの履歴そのものである。

このように住むことが放棄された城下の武家屋敷をあまねくみかん畑としたことで、昭和三十年代までの八十年間、土地利用の変化が抑えられた。つまり、近代化の過程で工業化を選ばず、今も萩のまちを支えるみかん栽培と漁業そして窯業（萩焼）によって都市を営み続けたことが、武家地の町割りを受け継ぎ、町人地を拡大せずに成熟させることにつながったのである。

萩の住人は奥さんもお年寄りも、軽自動車（みん）を操り、城下町以来の四六メートルほどの幅の道と隅切り（すみ）もない交差点を、譲り合いながら巧みに走り、そして曲がる。城跡や維新の志士の旧宅、伝統的な萩焼は一級の文化財である。しかしさらにその傍らで、萩市民によって継承され完全に住みこなされた近世由来の空間がそのまま至る所に息づいていることこそ、優れて都市遺産であると言えるのである。

本章は「朝日ビジュアルシリーズ 日本遺産14 萩・津和野」（朝日新聞社）所収の「城下町から都市遺産」に加筆修正したものです。



## 1 市民による「まち博」ゲスト体験

「萩まちじゅう博物館」(以下、場合により「まち博」と略す)を最初に訪れるお客さん(ゲスト)は萩市民である。彼らは、「まち博」を何度も訪れ、そして最も理解し、宣伝してくれるゲストである。したがって、市民に愛される展示、市民に分かりやすい解説が、めざす博物館像を実現する。まずはこの最良のゲストである萩市民による「まち博」体験を見ていくことにしよう。

### 市民と博物館

萩市民には、永く大切にしてきた博物館との歴史がある。終戦間もない昭和二十一年開館の「萩科学館」(熊谷町)、そして昭和三十四年に総合博物館として再編された「萩市郷土博物館」(江向)とのつき合ひである。現代の萩を担う世代は、皆この郷土博物館とともに育った。川内に一つの伝統校、明倫小学校の脇に建ちつづけたこの博物館は、放課後、校門から飛び出す小学生たちに、どれだけ未知への夢や郷土の誇りを与えたことだろう。しかしその建物は、国道一九一号の拡幅事業で二〇〇〇年三月に解体されることになり、当然、新たな博物館を二十一世紀の萩にいかにも新生させるかは、萩市民に



在りし日の萩市郷土博物館

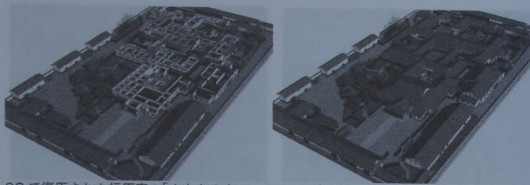
とって特別な関心事となった。

その思いを背負う新たな博物館は、「萩博物館」と名を改め、「まち博」のコア博物館として、建設地を藩政期の三の丸、堀内の萩藩主毛利家一門であった大野毛利家上屋敷跡に定めた。

明倫小学校からは少し離れたが、開館後は、夕方の堀内のまちにカバンを背負った小学生や中学生が流れ込み、萩博物館の庭や施設で遊んだり、学校からの調べものを学芸員に真剣に問いかける子どもの景色が見られるようになるだろう。また「まち博」のサテライト・スポットである長屋門で、顔見知りの「NPOまち博スタッフ」のおばちゃんにカバンを預け、敷地や建物のなかを駆け回る小学生たちの声が毎日響きわたる、そんな光景が想像できる。さらに土日や祭日には、博物館学芸員スタッフを中心に続けられている「子ども探検隊」といった、子どもの目で見えた萩の再発見、環境学習の取り組みが、「まち博」というフィールドのあちこちで繰り広げられる様子を見ることができさるであろう。

こうした放課後の博物館あそびや休日のイベントから帰ってきた子どもの話に、親や祖父母、兄弟が誘い出され、萩再発見のためのイベントなどへ参加の輪が広がっていくことを期待したい。こうした日常的なイベントへの参加は、時間に余裕のある主婦や退職者などが、博物館のボランティア活動や「NPOまち博スタッフ」へと足を踏み入れるきっかけともなる。





CGで復原された福原家：「まちなみウォークスルー」のシーンの一部（前頁2枚も）

んだら、「萩まちじゅう博物館公認ガイドブック」（以下、「公認ガイドブック」と略）を入手し、いよいよ自分の行きたいサテライトへ出発する。

公認ガイドブックだけでは物足りない、あるいは地理不案内という人などは、NPOまち博スタッフが相談相手になってくれる交流ゾーンの「萩再発見相談コーナー」をたずね、各サテライトへの移動方法やトレイルの歩き方を教えてもらうことができるし、自分だけのおたから探しのオリジナルマップをつくってもよい。場合によっては、「まち博」の都市遺産や文化遺産のデータベースとリンクさせオーダーメイドの地図を作成できる「萩博物館地理情報システム」をスタッフの手ほどきを受けながら使うことができる。

これら公認ガイドブックやオリジナルマップは有料となるが、収益はすべて「まち博」の文化遺産マネジメントに使われる。その他無料ゾーンには、萩市からの委託によりNPOまち博が経営しているミュージアムショップやカフェがあり、これらの収益も文化遺産のために使われる。無料ゾーンで様々な情報に触れたり、買い物や食事をしてお金を使うことも、「まち博」における遺産管理活動への貢献の一部となる仕組みになっている。



CGで復原された毛利伊予家長屋門



毛利伊予家跡の石垣の現況

## コア博物館Ⅱ「萩博物館」

まずはさておき、市民には新たな「萩博物館」に足を運んでほしい。そこが「まち博」への入り口だからである。本物の展示物はすべて萩のまちじゅうに散らばっているが、それらに関するすべての情報はこのコア博物館に集まっている。ここで学習し情報を集め準備を整えることで、萩を再発見する未知の旅へ出発することができるのである。

このコア博物館には、有料（五百円）の展示ゾーンと、無料ゾーンがある。有料ゾーンは、最新の展示システムによって萩の自然や歴史、考古、民俗に関する解説を行なう、いわゆる総合博物館としての展示機能の中心部分である。これに対し「まち博」のコア博物館機能は、おもに無料ゾーンに埋め込まれている。コア博物館の建物に入ると、まずエントランスから左奥のガイダンスコーナーに導かれ、市民、観光客いずれにも興味深く萩再発見を動機づけるような、七分程度のビデオ映像を見せる。そこを出ると、個人または小グループに分かれ、ロビーに設置されているいくつかのモニター装置に座り、萩再発見を実写ビデオとコンピュータ・グラフィックスの合成映像で疑似体験できる「まちなみウォークスルー」を楽しむ。これで探検のヒントをつか





浜崎おたから博物館の大道芸 (左)



地の魚料理が食べられる雑魚場食堂 (右)

文化遺産専門解説員とめぐるフィールド・ツアー

萩の文化遺産についてさらに深く学びたい、あるいは見過ごして気づかない大切に身近なおたからの発見方法を習い、家族や仲間と宝探しに出かけたという家族や市民グループ、民間団体などは「文化遺産専門解説員」を活用するとい。彼らは、萩の歴史や文化、自然について深い造詣と知識を有すると同時に、萩のまちじゅうに潜むおたからを発掘するための方法を身につけている専門家であり、「NPOまち博」に登録して、必要に応じて有償でまちじゅうの遺産解説に派遣される。では、解説員と一緒に城下町のフィール



浜崎おたから博物館での町家めぐり



コア博物館「萩博物館」の長屋門

サテライトのデイスカバリー・トレイルをめぐる「萩城下町」の場合

「まち博」では、まち歩きで体験する都市遺産に分かりやすいテーマがつけられていて、興味に応じてどれかを選ぶ。一つのテーマが示す都市遺産は、いくつかのサテライト(地区や施設)をめぐることによって理解できるようにになっており、それらを回る順番を決め、ガイドブックやマップを頼りに各サテライトをめぐるデイスカバリー・トレイルへと出かけていく。二〇〇四年十一月の「まち博」開館時点で用意されているテーマは、「萩城下町」のみであるが、ほかにも「明治維新」「萩の自然」「萩焼」「海と島の暮らし」(以上すべて仮称)といった都市遺産のテーマが次々と加えられて行く予定である。

「まち博」のフィールド展示として最初に用意されるテーマは、一章で説明した都市遺産としての「萩城下町」である。このテーマのフィールド(展示室)は、まず近世の城下町の範囲として一般に知られている川内の三角州内であり、その城下町と深いつながりをもつ対岸の鶴江、玉江の漁村や御成道沿いの椿町、そして周辺集落の様子を今日に留める地区として旧松本村をそれぞれサテライトとして含む。

江戸期の内にはほばすべての土地利用が完成していた川内については、「萩城





基礎石への建物の乗り方で江戸期長屋（右）と戦後の移築長屋（左）が判別できる

### 萩再発見、萩学への誘い

この新しいコア博物館は、萩の歴史を語り継ぐための情報拠点としての役割を担うことが期待されている。それは、歴史や風土のなかで育まれた「萩

と分かる。江戸時代につくられたものがただ壊れながら残っているのではない。時代の積み重ねの中でそれぞれの時代を生きた人々の知恵が、石積み模様のの中に息づいている。そうした発見と出会える。  
さらに解説員に連れられて「土塀と夏みかん」のサテライト、平安古に足をとる。そこでは道に面する建物の建てられ方から、それが町人が建てた町家の建物か、武家の末裔がよすがをしのいだ長屋の建物かの見分け方を教えてくれる。屋根の形、瓦の形、敷地の使い方、それが江戸期に遡るものか、明治以降のものかも、解説を聞けば一目瞭然である。道路のアスファルトと屋敷の境に埋まっている笠山石の縁石の砂を払い露にすると、かつてその上に建っていたはずの町家の格子戸や、待屋敷の板塀が目に見えるのが文化遺産専門解説員のフィールド・ツアーである。



文化遺産専門解説員による解説



時代が積み重なった石積み

ド・ツアーに出かけてみるとしよう。

コア博物館の長屋門をくぐり出て、「萩城、本丸・二の丸・三の丸」のサテライトへ足を踏み入れる。三の丸であった堀内は現在、国の重要伝統的建造物群保存地区の選定を受けていて地区全体が文化財であることを解説してくれる。歩きながら、武家屋敷や長屋門等の指定文化財の解説も聞けるが、このサテライトで面白いのは、どこまでも続く土塀や石塀の、とある一つの前で立ち止まって始まる解説である。

萩のまちなかに見られる建材の石は、大きく指月山麓から採れた花崗岩と笠山から切り出した黒色安山岩である笠山石の二種類である。城が最初に築かれた時代には花崗岩が盛んに使われた。やがて時が下ると加工しやすい笠山石が運ばれ一気に普及する（国定公園である笠山からの笠山石の採石は昭和五十八年に全面禁止となった）。こうした石材の供給年代の基礎を覚えてもらい、改めて今に残る堀内の石塀や土塀の石積みを見ていくと、思いがけない発見に出会う。江戸期にはおそらく隅矢倉を支えていた石積みが、幕末からだるうか、土塀を支えるようになり、今は崩れかけている。藩政期からのものと思っていたいかにも古そうな石塀が、実は大正以降に積まれたものだ



が萩であることの意味やその拠り所となる考えや生活・行動様式<sup>※13</sup>、すなわち「萩学」を探索することである。コア博物館では、この「萩学」を市民や訪問客に視覚的に分かりやすく体験してもらうための展示物として「萩学なんでもBOX」を設置している。この展示物は、「萩の火山の成り立ち」「松陰先生とその弟子たち」「農業と漁業の島・大島」など、萩に関する様々なテーマごとに、関わりのある実物・模型・写真・地図・パネルなどを一つの箱に詰め合わせたもので、展示に採用するテーマ・内容物の企画提案を市民からも公募している。

コア博物館では、萩学に関連する文化遺産の情報を常に公開しているため、学芸員窓口<sup>※14</sup>に直接出向いても、インターネットのホームページへアクセスすることによっても、気楽に様々な情報を手でできる。また双方向の情報交換に対応しているため、様々なレベルで、情報に触れたい、あるいは情報を伝えたいと考えている市民とのネットワークが形成されるようになる。

やがて活動が発展し、市内の主要な場所にサテライト・ステーションが配置されるようになれば、川内や堀内周辺に住む人たちがばかりでなく、そこに常駐する「NPOまち博スタッフ」を介して、市民の誰もが身近に博物館の情報やサービスとつながることが可能になる。このサテライト・ステーションでは、家のおたからについての相談や身近な文化遺産を「都市遺産リスト」や「文化遺産データベース」へ登録する相談、学校の宿題の調べものの相談、よそから訪ねてきたお客さんへの見所の情報やイベント情報、萩再発見おすすめトレイル<sup>※15</sup>について相談することも可能となる。

## 2 市民による「まち博」ホスト体験

市民がゲストをもてなすあるじ（ホスト）となつて「まち博」へ参加する方法は多様に用意されている。「おたからネットワーク」に応募して、「文化遺産専門解説員」や「まちかど遺産解説員」になるインタープリテーション活動や、「おたからマイスター」として担当する文化遺産の日常管理やモニタリングをおこなうマネジメント活動。そこまで専門的ではないが、様々な「まち博」のイベント等に参加し、身近な文化遺産を発掘したり、文化遺産を一市民として「まち博」へ登録申請する活動もある。また、コア/サテライト/トレイル・システムを構成する「サテライト・スポット」や「まち博情報スポット」に自分の事業所や土地の一部などを施設として登録し展示や解説に参加する活動。文化遺産と認定された自宅や事業所の建築などの保存、老木の保全、増改新築の際に地域に貢献する修理や修景を行う景観形成の活動なども、「まち博」への重要な参加方法である。

さらにこうした積極的な参加以外にも、募金的な方法でも貢献できる。市民が個人単位で「まち博」へ参加する方法として、入会金千円、年会費二千円を払ってNPOまち博の個人会員になることも活動を支える重要な参加方法である。定期的に更新されるまち博公認ガイドブックが送付されてくるなど、「まち博」の移り変わる活動情報を手にとって知ることができる。



#### 身近なおたからを萩の文化遺産に登録

「まち博」の博物館としての価値を支えるのは、再発見された萩市内のあらゆるおたから（文化遺産）であり、それらは「都市遺産リスト」および「文化遺産データベース」としてコア博物館で管理されている。この文化遺産たちには、個々で価値を説明できるものや、そのいくつかを組み合わせることではじめて萩にとって大切な一つの物語を紡ぎだすものなど様々なものがある。そうした価値や物語を、市民と博物館、NPOまち博が協働する博物館活動のなかで丹念に検証し、データベースやリストにして管理することで、市民や訪問客へのインタプリテーション（遺産解説）に使うことができるようになる。価値や物語が説明された文化遺産は、幅広くまちづくり資源として、またより質の高い観光の創出のための資源として生かすこともできるようになる。

では市民は、身近なおたからとしての文化遺産をどのようにして登録でき、登録するどのようなメリットが生まれるのだろうか。

家の蔵で眠っていたその由緒も分からなくなった古文書、町内で誰ということなく永年にわたってお祀りしてきた祠や地蔵さん、水路脇の一本立ちの老木、最近まで続いていたのに執り行われなくなった地域のお祭りなど、その価値を確かめておきたい、できれば将来に継承していきたいと思うモノ（有形の遺産）やコト（無形の遺産）があれば、まずコア博物館に電話や電子メールをするか、あるいは足を運んで相談することができる。

コア博物館で相談を受けた学芸員やNPOスタッフは、すぐに文化財の保護対象になるようなものでなければ、「おたからネットワーク」への申請や相談をアドバイスしてくれる。簡単な記入用紙と写真、地図といった必要な申請書類を提出し、場合によってはおたからを評価するための「おたからネットワーク」会員の集まりに出向いて、口頭での説明を求められることもある。登録が認定されれば、まち博の文化遺産データベースにまず登録され、その存在が萩の歴史に永久に記録されることになる。

さらに、萩を語る大切な物語である「萩城下町」や「明治維新」といった都市遺産の一部を構成する文化遺産として認定されれば、都市遺産リストにも登録され、後述するサテライトやディスプレイ・トレイルを成り立たせる重要な要素として活用できるようになる。もちろん、すべては義務ではなく、文化遺産データベースへの登録で留め、公開を断ることは自由である。

#### 文化遺産を展示・解説することによる「まち博」への参加

NPOまち博や行政と協働して「まち博」の運営に携わる「おたからネットワーク」は、「文化遺産専門解説員」「まちかど遺産解説員」「おたからマイスター」という三種類の文化遺産に関する人材を養成する。市民は、「おたからネットワーク」の募集に申し込み、所定の講座、研修を受講することで、その基礎となる資格を取得でき、希望や適正に応じていずれかの役割を担って活躍できる



ようになる。

まず一つ目の「文化遺産専門解説員」は前述のように、萩の都市遺産や文化遺産について深い造詣と知識、そしてそれらを発掘し評価する方法を身につけている専門家であり、「NPOまち博」に登録され、必要に応じ有償でまちじゆの遺産解説に派遣される。

二つ目の「まちかど遺産解説員」養成講座は、萩の都市遺産や文化遺産に関するもつと深い知識や情報、解説方法などを身につけて日常生活に生かしたいという市民向けのものである。この講座は、自家の観光業等の質の向上、あるいはこれから観光を視野に入れた業種の転換や拡大等を考えている事業所の経営者や従業員にもぜひ受講してもらいたい。養成講座を修了して「まちかど遺産解説員」の認定を受けた受講者は、自分の構える店舗や宿の店先に、例えば「この店に『まちかど遺産解説員』います。何でもおたずね下さい」といった看板を出すことができ、公認ガイドブックで、すでにその認定制度を知っている観光客は、安心してその店の暖簾をくぐる。そしてその界限の詳しい案内を聞くことができたり、次の目的地へ楽しみながらたどり着く道順を教えてもらうことができる。「まち博」というまちぐるみの活動とその店が連携していることで、訪問客に安心を与え、自ずと商売にも好影響が及ぶであろう。ホテルや旅館、民宿の宿泊客の知的好奇心も一層満たされ満足度も高まるに違いない。

三つ目は、市民ボランティアとして身近な文化遺産の日常的な管理やモニタリングをする「おた

からマイスター」の養成である。先の二つの解説員と同様に、萩の遺産に関する講習とおたからの発掘・評価手法、都市遺産リスト・文化遺産データベースの利用・更新方法などの講習を修了し資格認定を受けると、実際にフィールドに散在する文化遺産を管理する役割を担うボランティアとして活動することができる。また「おたからマイスター」の認定を受けた建築・土木技術者や造園技術者等が生まれてくることで、市民にとっても行政にとっても、安心して萩らしい建物修理や庭の手入れ等を頼める技術的環境が整ってくることが期待できる。

いったん講習を終えたこれらの人材に対しては、彼らのもつ遺産情報が時代遅れなものとならないように、また彼らを通じてまちかどから発信される最新情報がまちづくりに反映されていくように、引き続き「まち博」の都市遺産カルテや文化遺産データベースと情報交換を続けていく。

NPO運営スタッフとしての「まち博」への参加

「NPOまちじゆ博物館」の最大かつ唯一の目的は、「萩博物館」や行政と協力し、「まち博」という市民が主でありホストとなるまちづくり活動を支援していくことである。そのおもな手法は、博物館や公共駐車場、文化財施設の管理等をはじめとする公的事業の受託を受ける他、博物館や行政という公共部門では扱えない収益事業を運営し、その収益を文化遺産のマネジメント活動に生かすというものである。収益事業の主なものは、「文化遺産専門解説員」のフィールドツアー派遣やコ





新築家屋修景例 (中央の少し高い建物)



老朽家屋を修理した集会施設

とが、自分の住むまちの再発見を促すことは、ごく自然な成り行きであろう。「自分たちはそういうまちに住んでいるのだ・・・」という再発見である。そんな観光客をつい捕まえて、「そのマップには載ってないけどね、実はここは・・・」と余計な説明をしてくれる住民が出てくるようになれば、観光客にとって萩のまちは、まさにワンダーランド(不思議の宝箱)になるだろう。そうした交流のなから、自分のまちの景観のあり方、自分の店や家の姿のあり方を自問するようになれば、「まち博」の景観づくりへの参加に一歩踏み込むことになる。

文化遺産の一部として我が家の建物や塀などを考えるようになったとして、ではその増改新築をいかにすべきかという悩みはどこへもっていくとよいのだろうか。まずはコア博物館のNPOまち博事務局でアドバイスを受けるか、または市役所を訪れて相談することができる。これら組織はいずれも「おたからネットワーク」に組み込まれ、「まち博」の一部としての判断力をもっている。行政も一体となって「まち博」を運営していることが分かるはずである。

ア博物館のミュージアムショップやレストランの経営、公認ガイドブックの販売などである。萩市に住む人であれば、こうしたNPO運営のためのスタッフとしての参加も可能となる。

また、事業所や店舗などを経営している市民であれば、その業種や立地によっては、「サテライト・ステーション」や「サテライト・スポット」として登録を受けることが可能な場合がある。例えば指定文化財や由緒ある巨木などのサテライトを構成する文化遺産に自分の店舗などが近接している場合、建物や敷地の一部を登録し、その文化遺産に関する情報を展示したり、「まちかど遺産解説員」として訪れた人に解説をするなどして、「まち博」の一部機能を担うという参加手法である。これと似ているが、サテライトに属さない街路沿いや郊外道路沿いの店舗等であれば「まち博情報スポット」として自分の事業所や土地や駐車場などを登録し、「まち博」情報の展示や解説に参加する。こうした取り組みは、家業の発展との相乗効果も期待できるはずである。

#### まちの景観づくりによる「まち博」への参加

市民にとっては、日常とくに気にかけることもなく眺めている通りの景観が、特定のテーマをもつ都市遺産のサテライトとして価値づけられることで、新たな意味をもちはじめ。公認ガイドブックを手にした観光客が、「ここが江戸時代に職人たちが集まっていた町なのか!」「この土塀を毎日見ながら晋作は松下村塾に通ったんだなあ!」などと語り合いながら目の前を通り過ぎるこ



### 3 観光客の「まち博」体験

#### 「まち博」へのアクセス

マイカーやレンタカーで萩を訪れる訪問客にとっての最大の玄関口は、国道二六二号線による南からのアクセスである。萩中心部にアクセスするには、阿武川沿いを通って平野部に出るルートと、萩有料道路を使って最短距離で平野部に至るルートの二つがある。この二つのルートのいずれに分かれても、萩市域に入る際に「ようこそ萩まちじゅう博物館へ!」という大きな看板サインを見て、萩市域全体をフィールドとする「まち博」に入ったことを知らされる。

この看板で強く印象づけられた深緑色とダイダイ色のコントラスト鮮やかなイメージカラーとサインロゴは、この先の「まち博」に関係するあらゆるサインに使われているため、途中にある「まち博情報スポット」の指定を受けているコンビニエンス・ストアや店舗がすぐに目を惹く。準備のよい訪問者の場合は、そこで車を降り、「まち博公認ガイドブック」を購入したり、店員にこの先の道や「まち博」の情報を聞くことができる。



まち博玄関口となる萩駅舎とまあるバス

こうしたスポットでは車を止めなかった訪問客も、二つのアクセスルートが合流してすぐにある萩駅では、停車を促す大きな看板サインに促され、駐車場に車を停めて「萩まちじゅう博物館案内所」に向かう。復原された端正な駅舎の建物に入ると、親切そうな初老のスタッフがカウンター越しに出迎えてくれる。カウンターには「まち博公認ガイドブック」やその他マップなどまち歩きに有用な資料などが販売されており、それらを購入したり、「まち博」に関する簡単な情報やその日のイベント、駐車場の状況などについてスタッフに聞くことができる。

ここでの案内は、基本的にコア博物館への誘導である。あらかじめ設定されている観光車両用の道路を無料のマップで説明し、まずはコア博物館を目指してもらう。

長門市および阿武町方面からのアクセスについても同様のサインが誘導してくれるが、独立した「案内所」はなく、「まち博情報スポット」が同様の情報を提供してくれる。またこの二方向からのアクセスについては、海岸沿い道路を経由して博物館へ誘導するサインがあるため、コア博物館駐車場まで直接乗り付けることもできる。

公共交通で訪れる客に関しては、萩駅、東萩駅および萩バスセンターにある「まち博情報スポット」で情報を入手することができる。そこからコア博物館への市内交通については、「まち博」の新しい交通システムに対応した「萩循環まあるバス」が連れて行ってくれる。



まずはコア博物館「萩博物館」へ

こうしたアクセスの仕組みに乗った観光客は、まず初めにコア博物館である「萩博物館」を訪れることになる。有料ゾーンでじっくりと萩の勉強をした後、すでに述べたように、無料ゾーンで萩再発見のための情報を仕入れ、多くの人は「まち博公認ガイドブック」を片手に萩のフィールドへ飛び出していく。また先に述べたように、「萩再発見相談コーナー」でオリジナル・トレイルマップを印刷した地図を手に入れることもできる。無料ゾーンでは、文化遺産に関する情報だけでなく、宿泊施設や飲食施設など、まち歩きに必要な様々な観光利便情報も得ることができのがある。パソコンの端末操作になれている人には、一人で資料探索ができるブース「知っちよる館」もある。まち歩きを堀内から始める人は、そのまま博物館の長屋門をくぐって出れば、そこは「萩城下町」のテーマのサテライト「萩城・本丸・二の丸・三の丸」そのものである。たった今、無料ゾーンで見してきた「まちなみウォークスルー」の仮想世界を、本物の町並みの中で追体験できる。道端に残された江戸期の低い石垣を頼りに、失われた長屋門や土塀、塀越しにかつて見えた武家屋敷の面影を思い浮かべる楽しみを味わえるのである。

他のサテライトへ移動する人は、再び車に乗って案内されたサテライトの駐車場へ向かうこともできるし、併設されているレンタサイクルを借りて行動を始めることも可能である。川内の範囲であれば三角州で扁平な地形である。自転車を実に快適な移動手段であることはすぐに分かるだろう。

再びコアへ、そして再び「まち博」へ

サテライトめぐりに繰り返し出した後は、できればコア博物館へ再び戻ってきて、フィールドで見きたもの、触れてきたものの意味や背景にある物語をもう一度確認してほしい。無料ゾーンの情報探索コーナー「知っちよる館」に座ってじっくりと調べてみるのもいいし、それでも納得できない発見があった人は、ぜひカウンター奥の学芸員を訪ねてほしい。歴史、民俗、自然などの専門家が納得のいく情報を与えてくれるだろう。もし彼らがその場で返答できない質問には、後日、調査しての返信があるはずである。そうした訪問客の新鮮な発見が、また「まち博」に一つの文化遺産を追加するかもしれない。そんな楽しみが用意されているのが、この博物館の仕掛けなのである。

この「まち博」には、できればたっぷりとした時間を持ってきてほしい。用意されている都市遺産のテーマやサテライトは、端折っても一日ではまわりきれないものばかりである。最初の訪問がパッケージツアーの立ち寄りであったり、マイカーの日帰りであったとしても、やり残した萩再発見に、またじっくり時間を貯めて、あるいは何度でも来てもらいたい。

コア博物館そして「まち博」の情報は、日々更新されている。また来た時も、まずはコア博物館に来てほしい。厚みを増していく「まち博」のフィールドの様子をまずは確認してから、さらなる再発見の探訪へと繰り返し出してほしいのである。



## 三章 フィールドミュージアムと「萩まちじゅう博物館」

「萩<sup>\*13</sup>まちじゅう博物館」の取り組みはフィールドミュージアムの考え方に基づいている。このフィールドミュージアムも実は、フランスに起源するエコミュージアムの発想をその理念に取り入れている。ここではまず、ルートである欧州のエコミュージアムの理念と事例を概観し、続いてフィールドミュージアムの考えを解説する。そこから「まち博」の将来の姿を想像してもらいたい。

### 1 エコミュージアムの理念と仕組み

エコミュージアムは、一九七〇年代からフランスで広まった「エコミュゼ」を起源にもち、ユニークな博物館としてその後世界中に飛び火した。地道な活動を続けてきた本家のフランスでは現在、全国で百を超える数のエコミュージアムが登録され活動を続けているという。

このエコミュージアムとは、従来の博物館のように建物の中に資料を集めて展示するだけでなく、地域全体を屋根のない博物館と見なす新たな形の博物館活動である。具体的には、ある地域の人々

が自らの生活や文化として説明したいと考える歴史的遺構や自然環境、産業遺産などの有形、無形の文化遺産や地域の様々な資源について、住民自らが主体となって調査研究し、それらが展開するある一定の領域（テリトリー）において、現地であるがままに、あるいはより良い状態に保全・保存しつつ学習していく活動のことである。

そもそもエコミュージアムとは、直訳すると「エコロジー生態」＋「ミュージアム博物館」で「生態博物館」となる。このエコ (eco) という言葉は、「家、家族」を意味するギリシヤ語「オイコス (Oikos)」に由来し、エコロジー (ecology) やエコノミー (economy) のエコ (eco) と同じ意味である。日本で「エコ」と言うときどうしても自然の生態系のことばかりを指して使われるが、エコミュージアムは、「自然」環境と共に「社会」環境をも含んだ人間の生活全般をその対象としている。

博物館活動である以上、エコミュージアムには、展示物の科学的説明や学術的価値付けのプロセスが組み込まれていなければならない。住民の大切と思う自由意志に基づいて地域から抽出される展示物も、必ず科学の目にさらしてその意味を問う。そうした仕組みを内蔵することによって、エコミュージアムは「博物館的な」ものではなく、真正正銘の「博物館」となるのである。

さらに、地域の文化遺産群とそれらが織りなすストーリーを、多くの人が共有しながら維持管理していくには、その受け皿となるシステムや実際の空間、施設が必要となる。そのため、エコミュージアムの事例の中には、展開する地域をテリトリー（地域の特性や資源のまとまりによる領域）と



呼び、コアとサテライトおよびデイスカバリー・トレイル（発見の小径<sup>ニギハヤ</sup>）というシステムで展開する事例が多くある。

コア施設は地域の歴史や文化遺産を概観できる情報展示機能を持ち、ここを中心として地域の研究・調査・学習を行っていく。サテライトでは地域に残る歴史的遺産や地域で培ってきた文化や産業、および地域の自然などを現地体験できるように展示がなされている。デイスカバリー・トレイルとは、サテライトに展開する地域の歴史・文化・自然を発見する探索路である。

## 2 欧州のエコミュージアム

実際のエコミュージアムの形態は様々であり、しつかりとした経済活動として成り立っている有名なエコミュージアム（アイアンブリッジの事例）もあるが、一方では住民どうしの活動を中心としながらも、大切にされ息長く続いている取り組みや、地域の社会福祉活動として市民のコンセンサスを得て展開している事例もある（クルゾー・モンソレミーユの事例）。

ここでは誕生から三十年が経とうとしている欧州のエコミュージアムのなかから、代表的な二つの事例を取り上げ、エコミュージアムの魅力と取り組みのポイントを報告する。



アイアンブリッジ・ゴージ・ミュージアムの地図

アイアンブリッジ・ゴージ・ミュージアム  
（イギリス、シュプロッシャー州アルフォード）

このエコミュージアムは、十七世紀後半、アブラハム・ダービーが石炭を利用した製鉄法の実験をはじめた地域で、まさに産業革命の発祥の地にある。テリトリー内には、シンボルのアイアンブリッジ（写真1）という英国で初めてつくられた鉄橋の他、五つの博物館や産業遺産が保存・保全されており、それらを総合してアイアンブリッジ・ゴージ・ミュージアム（鉄橋渓谷博物館と呼んでいる。多くの訪問客はまずコア博物館の役割を果たしている「渓谷の博物館」を訪れる（写真2）。この博物館は、セバーン川沿いに建つ、当時の鉄製品の船積み倉庫を修理・改造したものである。隣接する駐車場は有料で、大型観光バスも駐車可能なゆとりとしたスペースがある。

まずここでチケットを購入することができる。このチケットは、バスポート形式になっている（写真3）。値段は大人が十三・二五ポンド（約千五百円）、子どもが八・七五ポンド（約千六百五十円）と決して安くはないが、全てのサテライトを回るまでは有効期限なしという形態になっているため割高感はなく、むしろそのことが再訪を促している。ちなみに一つのサテライトには一回しか入ることができない。サテライトはどこから回っても構わないので、「渓谷の博物館」以外でもこのバスポートは購入することができる。鉄で生きた人々の往時の渓谷の暮らしをジオラマ展示で学び、一





写真9



写真10

写真11



写真7



写真8



写真6



写真5



写真3



写真4

通り見終わると、八十人ほどが入る小さなシアタールーム(写真4)に通される。ここで「渓谷の博物館」を含んだこれから向かうそれぞれのサテライトの説明が約十分のビデオで上映され、ミュージアム全体のイメージをつかんでから安心してトレイル発見の小径に繰り出せる仕組みになっている。

「渓谷の博物館」を出て自然護岸が美しいセバイン川の河畔を五百メートルほど歩くと、ミュージアムのシンボルであるアイアンブリッジにたどり着く。このアイアンブリッジの前には、定期になる黄色のバス(写真5)が発着する。このバスはテルフォードの鉄道駅からアイアンブリッジまで、そして各々のサテライトを結ぶコミュニティバスの役割を担っている。テトリリー内ならば、三十ペンス(約六十円)のチケットをかうと何度でも自由に乗り降りができる。非常に安く便利なこのバスを、だいたい一日百五十人が利用しているという。

アイアンブリッジは、当時は有料の橋であり、その通行税を支払う料金を復元した建物がこの橋に関するインフォメーションセンターとなっている(写真6)。中では、アイアンブリッジの歴史についての展示があり、無料でもらえる手書きの地図を指差しながら職員が親切に説明してくれる。また、書籍も充実しており、各々のサテライトごとのガイドブックもここで全て揃う。

バスで十分ほど移動すると「プリーストヒル野外博物館」に着く。ここは開かれた地域一帯が野外博物館となっており、中には、実際に十七世紀から使われていた溶鉱炉などの産業遺産を囲むようにし

て、現地で修復された民家や移築されてきた民家で町並みが巧みに復元されている(写真7)。興味深いのは、こうした建造物だけでなく、運河の自然が美しく、またアヒルや豚などの家畜も放し飼いにされ、そこに当時のコスチュームに身を固めた従業員たちが働いている(写真8)。レトロな蒸気機関車も走っている。二百年をタイムスリップさせる徹底した演出には感心させられる。

再びバスで移動する「鉄の博物館」のサテライトには、アイアンブリッジ博物館の原点とも言える煉瓦造のタービー溶鉱炉が、現代的なデザインで覆った「おおいや」のなかで現地保存・展示されている(写真9)。同じ敷地内の博物館には、この工場が栄え溶鉱炉が稼働していた産業革命以前からの町の様子を、模型などを使い展示している。ミュージアムショップは、オリジナルの錆鉄(ちゅうてつ)の置物など豊富な品揃えで購買意欲をそそる。また溶鉱炉のすぐそばには、アブラムタービー一家が住んでいたタービーハウスが保存・公開され、当時の生活を再現している。

またこれらの近くには、子どもたちに科学や工業の技術を体験させ、設計の楽しさを教える体験型博物館として、二〇二二年八月に「エンジンユナイティ」がオープンした(写真10)。ここでは、本物の機械やミニチュアのエンジンモデルなど、実際に触れ体験することで、子どもたちが工業技術を学ぶ事ができる(写真11)。他のサテライトが過去の栄光や脚懸を展示しているのに対し、未来の技術者達のための展示施設を設けるといふことも忘れていない。

今博物館を運営しているのは民間のアイアンブリッジ・ゴージ。





写真13



写真14



写真15



写真16

ゾーと炭鉱の町モンソレミューという二つの町を中心に、石炭と鉄工業に関わる都市地域から成っている。クルゾーにあるテリトリー内で最も大きな博物館である「人と産業の博物館」では、国のモニュメント・ヒストリック（重要文化財）指定を受けている建物（写真13、14）とそこを中心に発展した産業、そしてそれらに関わってきた人々の歴史をテーマとしている。十八世紀後半にガラス工場として建築され、一八三〇年には、邸宅として利用され、一九七〇年から市が購入して改修し、博物館と地域住民の利用できるスペースとして使用されている。また、このエコミュージアムの事務所としての役割も担っている。この博物館は、アイアンブリッジ同様の産業革命期の栄光をテーマにしているが、観光的な収入を見込んで運営されているようには見えない。むしろ鉄が冷え、運河が無用になり、地域が衰退していく中で、かつてフランス全土を支えたほどの繁栄の歴史をしっかりと刻み、いまその都市に住む人々にとってのアイデンティティを確認するための博物館のように感じられた。

クルゾーから車で一時間ほど行くと、恐ろしいような水蒸気をあげる原子力発電所に隣接するモンソレミューという町に着き、そこには「学校の家博物館」と「化石の博物館」がある。「学校の家博物館」（写真15）では、十九世紀後半と二十世紀前半の教室を保存、再現しており、現在も授業に使っている。「化石の博物館」（写真16）は、そこから歩いて五分の所にあり、このエコミュージアムでは協力施設として普段から「学校の家博物館」と連携した学習の場とし

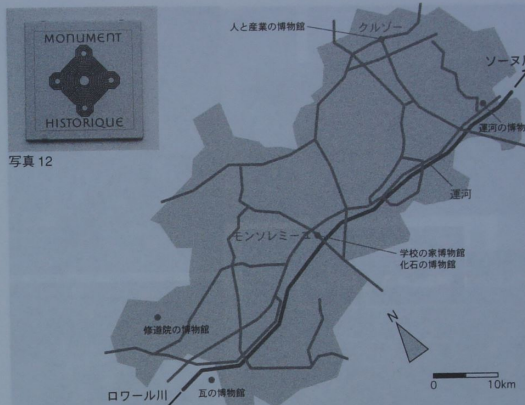


写真12

クルゾー・モンソレミュー・エコミュージアムの地図

ミュージアム財団で、帰国後に電子メールでいろいろとエコミュージアムの運営内容について問い合わせると、わずか二日で返事がきて、その対応の良さに驚かされた。二〇〇二年にこのミュージアムでバスポートを購入した有料入場者が約二十六万人いたという。訪れた客はほとんど一日をこのミュージアム内で過ごし、食事や買い物への出費も考えれば、経済規模としても大きく成功しているエコミュージアムであることが分かる。

#### クルゾー・モンソレミュー・エコミュージアム （フランス、ブルゴーニュ地方）

このエコミュージアムは、パリからTGV特急で約二時間のポルヌからさらに車で一時間ほどのクルゾーという町を北端にして始まる。そのテリトリーは約五百平方キロメートル、南北四十キロメートル、東西六十キロメートル、端から端まで車で移動すると一時間半はかかる広大な範囲である。人口約十五万人が住むこのエリアは、エコミュージアムが設置されたことで都市共同体を形成した。ここではコアとサテライトというヒエラルキーをつくらず、それぞれの都市の文化遺産をその場所と保全し、地域の博物館をつないでいくことでひとつのエコミュージアムを形成していることが特徴となっている。

地域の東に流れるソヌ川と、西に流れるロワール川をつなぐ運河を利用して発展してきた産業がテーマで、鉄鋼と手工業の町タル





写真 24

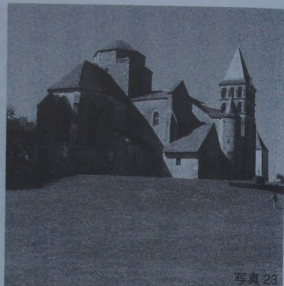


写真 23



写真 26

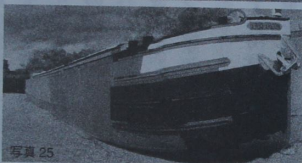


写真 25

は修復せず、時々の中で、近所の子どもたちを集め、本の読み聞かせなどをこなしている。この「瓦の博物館」は他の博物館と異なり、周辺自治体の信託を受け、地域に対する教育機能を重視して運用されており、このエコミュージアムの中でも重要な意味を持つ存在となっている。

このほかにもこのクルゾー・モンソレミーユ・エコミュージアムには、モニュメント・ヒストリックに指定されているながら現在も地域の教会として使われている非常に美しい「修道院の博物館」(写真23)や、このエコミュージアムのテトリエを貫く運河をテーマにした「運河の博物館」(写真24・25・26)などがある。

これらすべてのサテライト的な博物館に共通していたのは、その個々の博物館が、自分たちのリズムで無理なく運営されているということである。ほとんどの博物館は、午後二時からの開館である。専任のスタッフがいないわけではなく、また開館してもその日に必ず訪問客があるということもないけれど、その時間に担当できる者が鍵を開け、訪れる客に丁寧に解説してくれる。そういった、自分たちの時間の範囲中で楽しみながら誇りを持って、生活や文化を展示するスタイルがフランスにおいて百を超えるエコミュージアムを何十年にもわたって維持させている理由ではないかと考える。

観光による経済活動とのつながりが密接であることを前提として視察に訪れた筆者にとって、フランスのエコミュージアムは、意外なことでの連続で、そして教えられることの多い経験となった。



写真 22



写真 21



写真 17



写真 20



写真 19



写真 18

ての活動が行われている。この二つの博物館は、エコミュージアムの施設としては地元の人々も知らないほど地味な存在であり、入館料や何かの販売といったことにも無縁であるが近代化していく町の中で、関わる人たちの歴史に対する尊重と誇りがその存在を支えているように感じられる事例であった。

このエコミュージアムの最南端に位置する「瓦の博物館」(写真17)の入り口には、ここがクルゾー・モンソレミーユ・エコミュージアムのサテライトであるということを示す、やや派手なオレンジ色のモニュメント・サインがある(写真18)。ここは往時には四十軒もあった瓦工場の最後の二軒を保存しているもので、十六の市町村から寄付金を集めて買い取り、現在、博物館として再生するための修復が行われ、開館に向けて準備を進めているところである。

ここでは、軽度の知的障害者や若い失業者が働いており、彼らに建物や機械の修復あるいは瓦の焼き方を習得させる職業訓練をおこなっている社会福祉施設としての側面を持っている(写真19・21)。その時の工場内の写真が、ほぼ等身大のタペストリーにされ飾られている(写真20)。当時の機械も、展示されているというよりは、人々が作業していたまま時間が止まってしまったように残され訪れる者その当時に紛れ込んだような錯覚に陥れる展示がなされている(写真22)。従業員が手作りをつくった瓦やレンガは、実際の工場の修復工事に使ったり、あるいは記念のマークを入れて土産物として販売する予定であるという。当時瓦やレンガを焼いていた窯



### 3 フィールドミュージアムの考え方

地域の住民は、広い世界と交流することによってはじめて自らの文化的位置を確認することができ、そこから次世代の文化的発展も可能となる。そして現代世界において、この確認をおこなえる最も一般的な機会と場は、観光という主客交流の中にある。この考え方を地域において展開しようとするれば、地域の歴史・風土・民俗の織りなす環境から読み取ることのできる様々な個性を、そこに住む人々自らが認識し、地域文化として誤解なく的確に演出・表現することにより、地域の主人（ホスト）が来訪する客（ゲスト）と交流できる状態を創り出す必要がある。つまり、住民組織や自治体、企業やそれらの複合体といったホストとなりうる主体の形成と、個性の源泉となる地域文化を適切に表現できる地域空間の演出が求められることになる。

#### 地域空間演出とモデルカルチャー

こうした魅力ある地域空間づくりと住民・市民の取り組みを統合する演出手法としてフィールドミュージアムの考え方が存在する。フィールドミュージアムは、以下に述べるように、モデルを巧みに使ってゲストに集約的な地域文化のインテグレーションをおこなうコア施設「モデルカルチャー」の設置と、最終的な主客交流の舞台となる実際の地域空間を保存・再生・形成する地域景

観管理計画をその理念に持つ点においてエコミュージアムとは異なる。

まずはモデルによって地域文化の効果的なインテグレーションをおこなない、地域に実在し、それらを実証する本物への旅へ誘う、というのが「モデルカルチャー」の手法である。「モデルカルチャー」という言葉はもともと人類学の用語であり、その土地を訪れた観光客や研究者に地域の歴史を追体験させる「生きた博物館」のことである。このモデルカルチャー施設で示されるモデルは、①今日の地元文化に受け継がれている以上に厳密に展示対象の継承を行うという学問的な役割と、②大量に訪れる訪問者に文化財や民俗のレプリカをみせることによって、本物が破壊されるのを防ぐという防波堤的な役割を担っている。後者は、ある特定の文化を損なうことなく他の文化圏の人々により広く知らせる広域文化交流の役割とみなすこともできよう。

ここで「モデル」という言葉の意味を吟味しておく必要がある。本物や事実というものは、とかく複雑であったり不完全であったり、また時とともに変化していくものであるため正確に記述できない。これに対しモデルを用いる利点とは、それらの中から必要な断面や部分を濃縮して抽出し、理想化して説明できることである。しかしモデルはあくまでもレプリカであり本物ではない。より深い文化の理解を促すには、実在の町並みや文化財など本物の存在、すなわち文化遺産へのアクセス方法あるいは本物に興味を抱かせる情報システムの構築が必要となる。

「萩まちしゅ博物館」(以下、まち博)では、モデルカルチャーという言葉は使っていないが、コ



ア施設である秋博物館の展示思想に、この考え方が盛り込まれている。特に無料ゾーンにおけるモデル映像によるガイドダンスや「まちなみウォークスルー」で体験できる合成モデル映像による景観復元の疑似体験、「秋博物館地理情報システム」による秋に分布する本物の文化遺産への案内などは、まさにモデルによる本物の理解と本物の地域空間に興味を抱かせる情報システムとして用意されたものである。

#### 地域景観の管理

フィールドミュージアムにおいて、地域空間とはその地域の特徴を演出する舞台であり、人々の活動や観光の総合的な表現をおこなう場である。また地域景観は、視覚的に理解するという最も分かりやすい方法によって自然や歴史、文化、人々の活動を表現しているものであり、景観という舞台装置を整えることで、はじめてこれらを全体として理解させることができる。もし住民によって認知されている文化遺産があれば、それは景観形成の大きな手がかりとなる。しかし歴史的景観は多くの要素から構成されているため、文化財を単体保存する場合は異なり、時代の状況とともに変容する。しかもそれらを文化遺産として現代の景観形成に生かすという動的な管理プログラムを必要とする。このように、地域文化演出の最終的な舞台となる本物の地域空間を、整備・創造することにより、その歴史的特性や重層性を表出させようとするのが地域景観管理の考え方である。

#### エコミュージアムとフィールドミュージアム

以上見てきたように、この二つの博物館概念は、同じ目的を志向しつつも以下のような点で違いがあることがわかる。つまり、エコミュージアムがより博物館活動に対する探求的な態度、あるいは住民の自己実現手法としての側面が強いのに対し、フィールドミュージアムは、モデルと本物を意識的に使い分けることによって文化を外に向かって表現（演出）すること、そしてそこから生まれる主客交流に重点を置いている。また表現の舞台としての地域空間のあり方をより重視し、それらを生きた地域景観として管理していくことの大切さを指摘している。

こうした前提に立てば、「まち博」は、文化遺産の発掘・整理・展示・解説という博物館活動を基盤としつつ、それらの活動を総合化（integrate）する哲学としての秋学を提唱し、その秋学に基づく新たな文化活動や生産活動の創造、都市・地域景観の形成をも同時に試みようとしている。この点において、博物館活動の枠を超えた取り組みとすることができ、フィールドミュージアムと呼ぶにふさわしいと言えるだろう。

なお「まち博」の仕組みの中では、コア／サテライト／デイスカバリー・トレイルといったエコミュージアムとほぼ同じ言葉を用いている。しかし「テリトリー」という言葉については、領域支配的な意味が強く感じられるため、様々なストーリーの重層性を持つ秋の特性を考慮し、より平明な語感をもつ「フィールド」という言葉に置き換えられている。



## 四章 「萩まちじゅう博物館」の仕組み

ここでは、「まち博<sup>※</sup>」としての萩のまちづくりを実現していくための、市民、民間事業者および行政関係部門が一体となって展開する文化遺産マネジメントの仕組みを「萩まちじゅう博物館システム・マネジメント構想」として説明する。

「萩まちじゅう博物館」というまちづくりのシステム

外から見る「まち博<sup>※</sup>」は、コア/サテライト/トレイル・システムそのものである。これは、情報拠点としてのコア博物館があり、文化遺産を現地IIサテライトにおいてあるがままに展示し、デイスカバリ・トレイル(発見の小径<sup>※</sup>)をたどらせることによってその物語を解説するという、展示・解説の仕組みである。そしてこのシステムを成り立たせ、さらにまちづくりとして継続して行くために、本章で述べるような、「萩まちじゅう博物館システム・マネジメント構想」が策定され、確実に実行されていく必要がある。

この構想は大きく、対象とする文化遺産の価値そのものを管理する「萩まちじゅう博物館を支えるシステム」と、その価値を展示・解説する「萩まちじゅう博物館を展開するシステム」の二つの

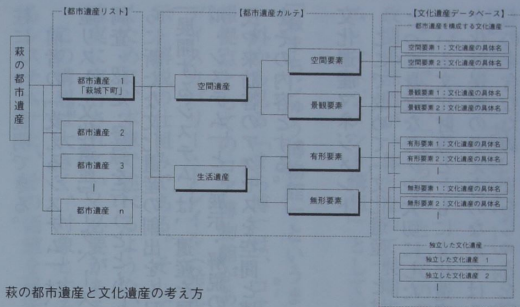
柱によって説明できる。

前者の「支えるシステム」は、文化遺産のデータベースと都市遺産のリストを管理する「都市遺産リスト・文化遺産データベース管理システム」、およびこれまで認知されていなかった遺産の発見・調査・認定・登録を行うとともに、それらの実際の中身である遺産の価値を維持・保存・保全し、さらに新たな文化遺産の創出をも目指す「文化遺産生産システム」の二つをその内容とする。後者の「展開するシステム」は、遺産を展示・解説する実際の空間をあつかう「コア/サテライト/トレイル・システム」と、展示・解説の情報をあつかう「都市遺産情報管理システム」、そして遺産への市民や来訪客のアクセスを空間と情報の両面においてサポートする「都市遺産活用システム」の三つをその内容とする。

文化遺産マネジメント

ここで改めて「文化遺産」とは何を指すのかについて確認しておきたい。「まち博<sup>※</sup>」では、市民にとつて身近なモノや大切にしたいモノ、受け継いでいきたいコトなどを、すでに認知され保護されている文化財等とともに文化遺産と呼んでマネジメントの対象とする。これら文化遺産は、従来の文化財保護の考え方のなかではその価値が見出され難かった有形、無形を問わない大小さまざまなものを含むため、まちじゅうを宝探しすることによっておびただしい数の対象が見出されることに





萩の都市遺産と文化遺産の考え方

なる。しかしいったん文化遺産として発見されたこれらモノやコトに関しては、系統的にデータベース化することで遺産そのものとその遺産に関する情報を管理することができるようになる。こうした文化遺産は、国や地域の宝として管理することも当然重要であるが、一方ではその継承者もしくは所有者の現在や将来の生活のために活用されるべきものでもあり、それに必要な行為全体（保存または保全、維持、継承、活用、モニタリング等）を文化遺産マネジメントと呼んでいる。

#### 都市遺産を展示・解説する

この文化遺産マネジメントにおいて最も重要となるのは、市民にとっても来訪者にとってもわかりやすい文化遺産の展示（「ブレゼンテーション」と解説（「インタープリテーション」）である。これについて「まち博」では、「都市遺産」という説明の枠組みを用いた文化遺産の解説を提案している。萩に住む人々には、訪れた人に説明してあげたい、そして次世代に伝えていき

いと考える地域の歴史や文化、自然や民俗等に関わる物語にストーリーがあるはずである。そしてそのストーリーは、裏付けとなる様々な文化遺産を目や耳にし、手にすることによってはじめて実感できる。「まち博」では、このストーリーとそれを証拠づける（裏付ける）文化遺産のひとつの集まりをテーマごとに総称して「都市遺産」と呼ぶことにした。萩の市民がストーリーとして語りたいたいこれら「都市遺産」には、すでに企画されている「萩城下町」以外にも、「明治維新」「萩の自然」「萩焼」「海と島の暮らし」（以上すべて仮称）といった多くのテーマが想定できる。

#### 空間遺産と生活遺産

こうした一つひとつの「都市遺産」は、萩博物館およびNPOまち博事務局で管理されるそれぞれのカルテのなかで、「空間要素」「景観要素」の二要素からなる「空間遺産」と、「有形要素」「無形要素」の二要素からなる「生活遺産」によって説明される。

ここでいう「空間遺産」とは不動産的な性格を持つ遺産であり、道路や地割り、河川・水路の流路といった空間を規定する地図上で確認できる要素を「空間要素」、その「空間要素」の存在を可視的に証拠づけるものの内、地域景観の特性をよく示している建築物や工作物、護岸石積、樹木などを「景観要素」と呼んで整理される。





町の歴史を語る語り部 (左) や昔ながらの海産加工技術 (右) など生活遺産の無形要素

また「生活遺産」とは、動産的な性格を持つ遺産であり、祭事や慣習、古くからの地名などに着目した民俗的な遺産、美術・工芸品や文書、絵図などに着目した芸術的な遺産、自然環境や市民とのかかわりを持つ生物に着目した遺産、そして資料・文献などモノやコトが記録されているものに着目した記録に関する遺産などが含まれ、目に見えないコトを「無形要素」、目に見えないモノを「有形要素」として分類する。

少し具体例を挙げて説明しておく必要があるだろう。例えば「萩城下町」というテーマの都市遺産がある。この都市遺産はサテライトの一つとして「港で栄えた商家町」というストーリーで説明される。浜崎周辺地区をサテライトのひとつとして持つ。浜崎には「空間遺産」として道沿いに建ち並ぶ町家群や御船倉、住吉神社の社殿や鳥居、松の古木といった「景観要素」があり、中世に由来するといわれる道筋や吹上げの地形、近世から変わらぬ地割り、御船倉付近の昔の海岸線と一致する筆界などの「空間要素」がある。そして浜崎の人々の暮らしの中には、「生活遺産」の「有形要素」として、毎年五月に開催されているイベントの「浜崎おたから博物館」で展示されているような古文書や古民具、美術品や伝統工芸品、住吉祭りの御船や祭事のための民具、

そして「無形要素」としては、住吉祭の祭そのものや祭で催される謡や芸能、あるいは語り部の古老や古くから伝わる海産物加工技術などが挙げられよう。

このように実際の地域では渾然一体となつて存在している都市遺産を、動産・不動産、有形・無形という容易に峻別できる指標によつて説明すると、その遺産の有する構造や現在の状況などが理解しやすく、またマネジメントの対象としてもとらえやすい存在となることが分かる。

#### 都市遺産と文化遺産の関係

以上のように、分かりやすいテーマで説明される都市遺産は、「空間要素」「景観要素」の二要素によつて構成され、その二要素はさらに最小単位である個々の「文化遺産」の集まりとして説明される。複数の「文化遺産」が集まって「空間要素」や「景観要素」を構成するのである。

注意しなければならないのは、都市遺産の構成要素となるものだけが「文化遺産」ではないという点である。ある時点ですでにリスト化されている都市遺産のストーリーには関係しなくとも、私たちの身の回りには、大切な多くの「文化遺産」が存在する。そうした都市遺産とは関係なく独立した(単独の)文化遺産も積極的に発掘し、より多くをデータベースに登録していくことが重要である。



## 「萩まちじゅう博物館」システム・マネジメント構想

### 【まちじゅう博物館を支えるシステム】

#### ■都市遺産リスト・文化遺産データベース管理システム

このシステムは、「都市遺産リスト」と個々の都市遺産の内容説明と管理台帳を兼ねる「都市遺産カルテ」の管理、および「まち博」が有するすべての文化遺産（都市遺産の構成要素を含む）を掲載する「文化遺産データベース」の管理からなる。

#### ①都市遺産のリストおよびカルテの管理

「おたからネットワーク」および都市遺産の認定機関を適切に運営することで、一覧表としての「都市遺産リスト」およびそれら個々の遺産のプロファイルを示した「都市遺産カルテ」を作成し更新（改訂・追加）していく。都市遺産リストは、後述するプロセスを経て登録される遺産の名称がリスト化され「閲覧」されるもので、都市遺産カルテには、各都市遺産のストーリーおよびそれらを構成する要素としての文化遺産の組合せやその分布状況等が示される。このリスト化およびカルテ化の作業を通して、都市遺産は保護対象やまちづくり資源として位置づけられることになる。

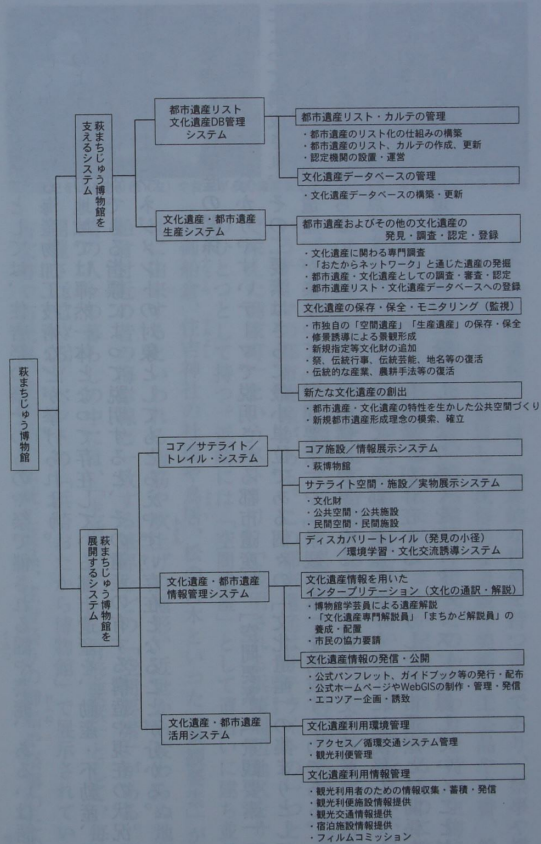


図 「萩まちじゅう博物館」システム・マネジメントの概要

この「都市遺産」のストーリーは、市民一人ひとりが訪れた客や友人にまちの紹介や自慢をする時、思わず口をついて出てくるように、また行政や民間事業者によるハード、ソフトにかかわるあらゆるまちづくり事業の検討時に容易に参照できるように、誰にでも理解できる方法で記述される必要がある。すでに周知されている文化財はもとより、市民の身近でこれから発見されていくその他の文化遺産についても、あるものは独自に、またあるものは都市遺産のストーリーの存在を証拠づけるモノやコトとして整理され、展示したり解説したりする際にすぐ使ってもらえるように日常的にマネジメントされていることが求められる。

#### ②文化遺産データベースの管理

すでに認知されている文化財や、新たに「おたからネットワーク」等を通じて発掘され認定機関での登録認定を受けた文化遺産のデータベースを管理する。ここではデータベースそのものの構築はもとより、後述する個々の文化遺産のモニタリング成果を反映したデータベースの更新（項目修正・追加・削除）と、都市遺産リストの更新に対応したデータベースの更新（項目修正）をおこなう。つ



まり市民にとって身近で大切な伝えていきたいモノやコト(「文化遺産」を系統的にデータベース化し、文化遺産や都市遺産を展示・解説する際すく便する状態にしておくために日常的に情報を管理しておく。

### ■文化遺産・都市遺産生産システム

文化遺産生産システムは、「都市遺産およびその他の文化遺産の発見・調査・認定・登録」、「文化遺産の保存・保全・モニタリング(監視)」、そして「新たな文化遺産の創出」の三つのシステムにより構成される。

「都市遺産およびその他の文化遺産の発見・調査・認定・登録」は、専門調査などにより遺産の発見および価値づけを行い、認定機関の審査を経て都市遺産をまわつくり資源として位置づける(登録する)ことであり、これにより次世代に伝えていきたい文化遺産を明確化する。

「文化遺産の保存・保全・モニタリング」は、周知の指定等文化財およびその他の文化遺産について、市民と行政の協働のもと、広くその保存・保全・モニタリングを行っていくことであり、これにより都市遺産の持つ価値そのものの保存・継承が可能となる。

「新たな文化遺産の創出」は、秋学により新たな文化遺産創造の理念構築を行い、その理念に基づいて新規の民間建造物の景観資源

化や伝統技術等の振興による新たな文化遺産の創出を図っていくことであり、今ある文化遺産だけに頼るのではなく、都市計画や産業、市民活動等により未来の文化遺産を新たに創出するまわつくりを目指す。

### ①都市遺産およびその他の文化遺産の発見・調査・認定・登録

これまでも行われてきた文化財調査や埋蔵文化財発掘調査を含む文化遺産にかかわる専門調査、および「おたからネットワーク」を通じた新規遺産の発掘や市民からの任意の登録申請等により、これまで認知されていなかった都市遺産の発見を行う。そして必要に応じて、発見された都市遺産や文化遺産の価値づけのための調査を実施し、対象となる文化遺産の履歴や価値、意味等を明らかにし、認定機関による審査を経て都市遺産リストに登録。その価値をカルテに記述し、文化遺産データベースに、都市遺産を構成する文化遺産として登録する。都市遺産を構成する要素とはならない単独の文化遺産については、文化遺産データベースのみに登録する。

### ②文化遺産の保存・保全・モニタリング(監視)

既存の指定等文化財については従来の文化財保護行政を堅持し、それらの文化財としての価値を保存修理・復旧等の事業によって確実に保存・保全するとともにそれら価値が確実に維持されているかのモニタリングを行う。また従来行われてきたように、継続して新規の指定等文化財の追加を継続して進める。

新たに発見・登録された文化遺産については、その文化遺産の特性を十分に考慮して、文化財保護部局や都市計画部局等の関連部局が横断的に協力することにより、価値を共有し継承していくためのマネジメント計画を定める。文化遺産の実際のマネジメントには「おたからネットワーク」の養成する「おたからマイスター」の活躍が期待できる。

### ③新たな文化遺産の創出

ここでは「まち博」を担う新たな文化遺産の創出に取り組む。具体的には、公共部門による都市インフラ整備や市街地開発等の際に文化的に保全しつつその特性を生かした公共空間づくりを行う。また条例等制度や適切な補助事業を導入するなどし、民間建造物等景観要素に対する助成(技術支援・経費補助等)による景観誘導を行って景観形成を図る。こうした都市空間の再編をともなう新たな文化遺産の創出のためには、いずれの計画も都市計画マスタープランの十分な整合性をもつことが求められる。

また、秋学の研究会やシンポジウムを通して、新たな文化遺産創出の理念構築を図る。地域の祭や行事、方言や地名等の消失した生活遺産については復活をめざすとともに、伝統技術・芸術等の振興により新たな生活遺産の創出をめざす取り組みを行う。こうした生活遺産に対する理解の深まりや伝統的な技術の復興を足場にした特

産品の開発や、「まち博」のミュージアムグッズ等の開発も可能である。

このように将来に向けての都市遺産の拡大と充実を、過去の文化遺産だけに頼るのではなく、これからの都市計画や産業、市民活動等により創出していく視点を常に持つことが重要となる。

### 【まちじゅう博物館を展開するシステム】

#### ■コア/サテライト/トレイル・システム

コア/サテライト/トレイル・システムは、以下に述べるような、情報展示システムとしての「コア施設」と実物展示システムとしての「サテライト空間・施設」および環境学習・文化交流誘導システムとしての「ディスプレイ/トレイル」の三つのシステムからなる。

#### ①コア施設/情報展示システム

「まち博」にアクセスする市民や来訪者がまず最初に立ち寄ることを前提としたシステムであり、「まち博」にかかわるあらゆる情報がここに整理・集積され、市民や来訪者が知りたい情報を効率よく的確に得ることができるよう機能が求められる。具体的には、二〇〇四年十一月に開館する秋博物館がこのシステムを担い、知りたい情



報が分かりやすく体系的に示される情報展示と情報提供が行われる。

## ②サテライト空間・サテライト施設／実物展示システム

「まち博」を構成するさまざまな都市遺産やその他の文化遺産そのもの、あるいはそれらを解説するための施設などがサテライトに相当する。都市遺産の他にも、既存のあるいは今後新設される美術館や資料館などの公共施設も同様にサテライトとして位置づけることができる場合もある。あるいは寺社境内のような民間空間、民営の博物館、資料館、ギャラリー、アトリエといった施設についても、文化遺産に近接して解説機能を果たしうる場合や、「まち博」の趣旨に沿って文化遺産の価値を高める性質を有するもの場合はサテライト空間や施設となりうる。

## ③デイスカバリ・トレイル（発見の小径）／環境学習・文化交流誘導システム

市内全域に散在するサテライトについて、その関連性や価値の理解を目的としたトレイルの設計・整備を行う。個々の都市遺産を構成する文化遺産群をそのストーリーに基づいて設定されたデイスカバリ・トレイルに沿ってめぐることにより、これまで気づかなかった文化遺産の価値の再発見を促す。そのため散策路の整備や理解を促すための説明板の設置、誘導のためのサイン計画などが必要となる。また、常に発見があり魅力的なトレイルであるために

修後に認定を受けたプロのインテリプリタをコア施設やサテライト施設、トレイル上に配置していくことができる。また、プロでなくともボランティアやパートタイムでインテリプリタをこなすことのできる「まちかど遺産解説員」をできる限り多く養成し、まちなかの様々なシーンで、気軽に「まち博」の文化遺産解説ができるような環境創りをめざす。

こうしたボランティア豊かなインテリプリタ達が、蔵博物館で日々更新されていく文化遺産情報にリアルタイムでアクセスし、より正確で新鮮な情報に基づくユニークな遺産解説をできるようにすることは、「まち博」の取り組みのなかでも最も重要なプロジェクトとなる。こうしたインテリプリタの存在により、市民どうしや市民と訪問者との間に新たな交流が生まれ、「まち博」の活動が展開していく。

さらに従来は秋の貴重な歴史や文化に関する十分な知識がないままに、宿泊や土産物、飲食店で観光客を営んでいた民間事業者も、この「おたからネットワーク」の養成講座を受講し認定を受けることで、訪問客に信頼されるインテリプリテーションをサービスに利用することもでき、観光の質の向上を図ることが期待できる。

## ④文化遺産情報の発信・公開

都市遺産リストおよびカルテは、最終的には一般公開を目指す。しかし、その公開に向けては、公開に伴う盗難やプライバシー等の

は、市民・観光機関等による提案、専門調査、モニタリングが継続的に行われる仕組みをつくる必要がある。

## ■文化遺産・都市遺産情報管理システム

文化遺産・都市遺産情報管理システムは、「文化遺産情報を用いたインテリプリテーション」と「文化遺産・都市遺産情報の発信・公開」からなる。前者は、「おたからネットワーク」で養成され認定を受けたインテリプリタにより、市民や来訪者に対して文化遺産の価値を伝える体制を整備することを内容とする。後者は、文化遺産・都市遺産にかかわる情報をガイドブック等の刊行やホームページ等を通じて発信するなど、文化遺産や都市遺産にかかわる情報と効果的に発信できる情報管理と発信の体制を整備することを内容とする。

### ①文化遺産情報を用いたインテリプリテーション（文化の解説）

文化遺産の価値を理解することは、その文化遺産の物語を知らない市民にとって容易なことではなく、文化遺産の価値や魅力を解説するインテリプリタの存在は不可欠である。当然ながら専門家である博物館学芸員は貴重なインテリプリタであるが、絶対数が限られているため十分な活躍は期待できない。

そこで「おたからネットワーク」に文化遺産解説を専門的にこなす「文化遺産専門解説員」養成コースを設ける。一般から募って研

諸問題を検討しつつ、段階的に取り組む必要がある。また都市遺産リストおよびカルテについては、作成次第直ちに行政関係各課へ周知し部局間での共有を図る。都市遺産および文化遺産の存在を共有した上で、開発等に対する保全等措置を確認するとともに、社会教育、生涯学習、産業観光などでの活用を図るものとする。

以上のことを考慮、実行した上で、「まち博」や文化遺産・都市遺産の情報を市の内外に広く発信する。その方策として、アナログ・メディア（刊行物等）による発信としては、「まち博」の目的やトレイルを掲載した公式パンフレットやガイドブック等の発行・配布による広報活動が考えられる。また「技術を活用し、公式ホームページやWebDS等の活用によるリアルタイムの情報提供が可能となる。情報の更新にも配慮し、常に「まち博」での取り組みが分かる情報発信、情報の普及・公開に努める。さらには都市遺産の普及に向けて、必要に応じてシンポジウムの開催や遺産登録プロジェクトの贈与等、様々な普及活動を行う。

これらの作業を進めていく上では、「まち博」に関するイメージ・ロゴやシンボル・カラーといった内容についての全体デザイン指針を明確にしてガイドラインを策定していくことが重要である。

## ■文化遺産・都市遺産活用システム（ツーリズム・システム）

文化遺産・都市遺産活用システムは、文化遺産利用環境管理と文



化遺産利用情報管理からなり、これはいわゆる従来という観光システムに相当するものである。前者は、まちじゅうに展開する文化遺産をめぐるために必要な交通ネットワークや観光利便施設を整備することを内容とする。また後者は、観光活動の充実やその発展のために必要な情報提供を行う体制整備を内容とする。

#### ①文化遺産利用環境管理

利用環境としてまず必要なのが、外部から「まち博」へのアクセス交通の整備である。これについては、すでに小郡林道路や萩三隔道路の広域基幹道路の整備が進められている。市内に入ってから、三章で示したように、市域入り口におけるゲート看板整備、「まち博情報スポット」の指定、余裕のある駐車場を完備する「萩まちじゅう博物館案内所」の設置と以下の内容と連動する観光交通システム計画の策定が必要である。

続いて市内のサテライト間の移動やトレイル間の乗り換えのための交通整備としては、市街地内の公共交通である「萩循環まあーるバス」の路線拡大や変更、増便が必要であると同時に、「マイカーで移動する客のためのサテライト・ステーションにおける駐車場の整備が必要となる。さらにサテライト内やトレイルの移動については徒歩や自転車移動を快適にするための遊歩道や自転車道の整備あるいは指定が求められる。それぞれの結節点やサテライトには、必要に応じて観光利便施設としての駐車場や休憩所、便所等を配置す

## あとがき

今後どのように展開するのか未知数な「萩まちじゅう博物館」が、あたかもすでにフル稼働しているように書いた本書は、萩学を提唱すべき「萩ものがたり」シリーズの一編としては、いささか不謹慎な内容かもしれない。しかし、ここで描いたような、地域文化を都市政策の根本に据えたまちづくりの取り組みが、もしかしたら萩でなら実現するかもしれないと考えた時、この空想小説の必要性を感じたのも事実である。

「まち博」の実現に最も大切なのは、コア/サテライト/ディスプレイ/トレイルが連動して形成される文化遺産の情報ネットワークへ、一人でも多くの萩市民がアクセスし続けてくれることであり、それによって身近な文化遺産の存在に気づき価値を理解する人や組織を増やしていくことである。そうした理解者たちが、文化遺産の日常的な管理活動に取り組み、自分の事業のあり方や家の建て方などに萩らしさへのこだわりをもつようになれば、まちには今とは違った空気が流れ始めるだろう。そんな日がくるのを夢見ている。

なお本書の執筆に当たり、萩学に未熟な筆者に様々なアドバイスを頂いた萩博物館学芸員の皆様、そして博物館準備室の方々に心よりお礼を述べたい。

平成十六年十月

西山 徳明

る。それら道路や歩道等施設の整備の際には、効率性や合理性だけでなく、文化遺産を尊重した路線やデザインが求められることにもなり、市民や来訪者が安心してめぐることができるように安全性にも十分な配慮が求められる。必要に応じて交通規制の見直しも必要となる。さらに国際観光地化を目指す上で、海外観光客に優しい利用環境のあり方にも十分な配慮が必要である。

#### ②文化遺産利用情報管理

「まち博」をめぐる市民や来訪者が必要とする観光利便施設の情報や交通情報、宿泊施設情報等の情報提供のシステムを「まち博」における文化遺産情報の提供システムと連動させることが求められる。観光目的地としての「まち博」に正面から取り組み、利用者によりわかりやすい情報システムを確立する必要がある。そのためには、旅行エージェントや地元観光事業者、マスコミ等との連携を図りながら進めていく必要がある。提供される情報についても常に最新で正しいものに更新するなどの管理が求められる。



## ●用語解説

- ※1 インタープリテーション：言語の翻訳の意。転じて地域の歴史や文化、文化遺産などについて訪問客や住民などに解説すること。
- ※2 インタープリタ：インタープリテーションをする人。「まち博」では「文化遺産専門解説員」「まちかど遺産解説員」がそれに当たる。
- ※3 エコミュージアム：フランスで始まった地域を屋根のない博物館と考える博物館活動。コア/サテライト/ディスカバリー・トレイルの仕組みをもつものがある。
- ※4 コア博物館：エコミュージアムの情報センター的な中心施設。「まち博」では「萩博物館」が相当する。
- ※5 サテライト：現地に展示されている本物の遺産または遺産にまつわる博物館施設など。面的なひとまとまりの地区（堀内地区、浜崎地区など）や点としての単独の施設（美術館や資料館など）がサテライトとなる場合がある。
- ※6 ディスカバリー・トレイル：サテライトやエコミュージアム全体を理解するために設定される「発見の小径」という名の散策路（探索路）。
- ※7 フィールドミュージアム：エコミュージアムの考えを含みながら、コア博物館の機能をより明確にし、地域の空間演出を重視したまちづくりの取り組み。「萩まちじゅう博物館」の基本的な考え方。
- ※8 サテライト・ステーション：面的なサテライトの情報拠点。駐車場等を備えディスカバリー・トレイルの起点・終点ともなる。
- ※9 サテライト・スポット：ディスカバリー・トレイル上にある遺産スポットあるいはその遺産に関する情報施設。
- ※10 萩まちじゅう博物館案内所：マイカー等の自動車での訪問客に「まち博」に入る前に、必ず車を停めて情報を入手させるための郊外にある案内所。
- ※11 まち博情報スポット：「まち博」の中にある店舗や事業所などで、「まち博」の情報スポットとして登録されている民間施設。「まち博」に関する様々な情報を得ることができる。
- ※12 萩博物館：2004年11月に開館する萩市の新しい総合博物館。「まち博」のコア博物館の役割を果たす。
- ※13 萩まちじゅう博物館：市域全体をフィールドと呼ぶ展示室と見なし、屋根のない博物館として文化遺産を現地で展示しつつ、それらを根拠に新たな文化活動の創造や地域の景観づくりをするまちづくりの取り組み。
- ※14 NPO萩まちじゅう博物館：萩市の文化遺産を管理するという公益事業を目的とする特定非営利法人。得られる収益は「まち博」の文化遺産マネジメントに使われる。
- ※15 文化遺産：地球や地域の自然に対し永年にわたって人間が働きかけ続けた結果として生み出された遺産。有形・無形を問わず、現代を生きる人間にとっての価値が説明できるものであり、その価値を子孫にも受け継がせたいと誰もが思う継承したい「モノ」や「コト」。
- ※16 都市遺産、都市遺産のテーマ、都市遺産のストーリー：萩に住む人々が子どもたちや訪れた人に説明したい、そして次世代に伝えていきたいと

- 考える都市や地域の歴史や文化、自然や民俗等に関わる物語＝ストーリーとそれを証拠づける文化遺産群にテーマを与え「都市遺産」と呼ぶ。「都市遺産」には、「萩城下町」「萩焼」などのテーマが想定できる。
- ※17 都市遺産リスト：世界遺産リストと同様、萩の都市遺産を一覧表にしたもの。当初は「萩城下町」から始まり、「まち博」の取り組みが進むとともにその件数が増えていく仕組みになっている。「まち博」が管理する。
  - ※18 都市遺産カルテ：カルテに登録された一つの都市遺産が、どのようなストーリーで説明され、どのような文化遺産群によって成り立っているかを説明した票。「まち博」が管理する当該都市遺産の管理台帳を兼ねる。
  - ※19 文化遺産データベース：「まち博」のフィールドに存在するあらゆる文化遺産を整理したもの。中に都市遺産を構成する文化遺産も含むが、それ以外の独立した文化遺産も同様に「まち博」が管理する。
  - ※20 おたからネットワーク：まちじゅうのおたから（文化遺産）を発見し、価値を鑑定し、保存、保全し活用していくための仕掛け。市民組織、民間事業者組織、専門技術者組織、研究者組織、行政組織等が構成員となり、発見されたおたからの鑑定、都市遺産リストや文化遺産データベースへの登録認定をおこなうとともに、おたからを発掘・展示・解説する人材として「文化遺産専門解説員」「まちかど遺産解説員」「おたからマイスター」を養成する。
  - ※21 文化遺産専門解説員：おたからネットワークの養成講座を修了して認定されるプロの解説員。「まち博」の文化遺産や都市遺産を市民や訪問者に専門的に解説する。フィールドツアーを主催する。
  - ※22 まちかど遺産解説員：おたからネットワークの養成講座を修了して認定される市民ボランティアの解説員。特に任務はないが、多くの「まちかど遺産解説員」が「まち博」に展開することで、層の厚いまちづくりとしての文化遺産のインタープリテーション（解説）が可能となる。
  - ※23 おたからマイスター：おたからネットワークの養成講座を修了して認定される市民ボランティアのNPOスタッフ。マネジメントを委託された身近な文化遺産について日常の管理やモニタリング（監視）をおこなう。
  - ※24 ボランティア：「ボランティア」の本来の意味は「自発的に（な）」であり、「無償で（の）」という意味ではない。自らの意志で行動することを尊重し、場合によっては必要な報酬を受ける場合もある。
  - ※25 萩学：「萩が萩であることの意味やその拠り所となる考えや生活・行動様式」を探求する学問または活動。自然・歴史・民俗・美術工芸などあらゆる分野で「萩」についての調査研究を行い、日本の近代化に果たした役割などの地域特性を明らかにする。
  - ※26 ホストとゲスト：人類学では、観光＝ツーリズムの本質は主客交流であるとする考え方があり、地域のあるじ（ホスト）と観光客（ゲスト）が互いの文化を尊重しつつ主体的に交流することが大切であるとする。
  - ※27 学芸員：萩市職員として萩博物館の博物館活動を司る研究職員。萩博物館には、歴史、陸上生物、海洋生物、民俗学等の専門家がいる。
  - ※28 伝統的建造物群保存地区：地区全体を歴史的な町並みとして文化財として保護する制度。文化財保護法に基づき、萩市では、堀内、平安古、浜崎の3地区が国の重要伝統的建造物群保存地区の選定を受けている。



萩を知ろう！萩を楽しもう！萩を伝えよう！

シリーズ「萩ものがたり」③のご案内

## 萩開府

—毛利輝元の決断—

北村知紀



関ヶ原合戦で敗れた毛利輝元は、芸州広島を追われ、防長二州に封じ込められ、萩に城を築いた。なぜ萩だったのか、どんな町づくりを行ったのか、なぜ三十六万九千石なのか。四百年前の苦難と決断は、現代にも多くの指針を示してくれる。

萩開府四百年記念出版。

A5版 68頁 定価600円(税別)  
お申し込みは直接 下記「萩ものがたり」まで

第3回(2005年4月)発行予定

松陰先生の言葉 明倫小学校監修 一坂太郎編

密航留学生たちの挑戦・長州ファイブ 宮地ゆう

既刊

①萩の椿 吉松 茂 600円 ②高杉晋作100問100答 一坂太郎 500円

※出版予定タイトル(変更になることがあります)

◎品川弥二郎(産業) ◎藤田伝三郎(経済) ◎松下村塾の人々 ◎高島北海(画家)  
◎幕末の科学者・中嶋治平 ◎東京の中の萩 ◎大阪の中の萩 ◎萩偉人伝 ◎萩見聞・萩語録  
◎萩市の文化財を歩く ◎萩焼 ◎萩の年中行事 ◎萩沖の島々 ◎萩の伝統産業  
◎萩の夏みかん ◎巨樹・古木探訪 ◎萩沖の魚たち ◎萩の天然記念物

萩ものがたりは、定期購読ができます。

年会費2,000円にて、年間4タイトル(4・10月発行)を定期配本。

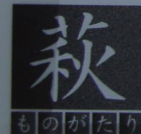
\* 定価割引の特典があり、確実にお手元に、送料は無料!

お申し込み方法 ハガキ・FAXでの申込み 住所、氏名、電話番号をご記入ください。

電話・インターネットでの申込みも受けします。

会費のお支払い方法 申込みと同時に郵便振替用紙をお届けします。

銀行からの口座引き落としもできます。



有限責任 萩ものがたり  
中間法人

〒758-8555 山口県萩市大字江向510番地

TEL 0838-25-3233 FAX 0838-26-5458

http://www.city.hagi.yamaguchi.jp/portal/story/index.html

E-mail story@city.hagi.yamaguchi.jp

落丁本・乱丁本は発行所宛にお送り下さい。送料発行所負担にて取り替えます。

刊行のことば

山口県萩市は、本州西端に位置し日本海に面します。江戸時代は毛利三十六万石の城下町として栄えました。幕末には吉田松陰をはじめ多くの逸材を輩出した明治維新胎動の地として知られています。

このようなことから全国に例をみない近世の都市遺産、明治維新開拓史跡や史料、近代日本の礎を築いた多くの人物に加え、北長門海岸国定公園の自然美など、宝物。ともいべき資源に恵まれています。

しかしながら、明治維新は風化しつつあると言われるように、かつては萩に伝承されてきた物語などが消えつつあります。

毛利輝元が安芸の国(広島県西部)から萩の地に移封され、開府してから、平成十六年(二〇〇四)は四百年の節目となります。

そこでこれを機に、萩に残る厚みのある歴史文化・人物、豊かな自然、多様な行事や風物、民間伝承、伝統産業など、後世に語り継ぐべき萩のすべてをブックレット・シリーズ「萩ものがたり」として定期的に刊行し、後世に伝承するとともに、全国に向け発信することとしました。

読者の皆様、この小冊子を活用され、萩の素晴らしさを楽しみ、理解する一助となるよう願ってやみません。

〈著者紹介〉

西山徳明



九州大学教授、国立民族学博物館客員教授。一九六一年、福岡県生まれ。京都大学大学院修了後、九州芸術工科大学の助教を経て現職。専門は都市計画。萩市や白川村、竹富島(沖繩県)等において歴史的な集落・町並みの保存やまちづくりについて研究を展開中。主な近著に「別冊太陽シリーズ 日本 の町並みⅡ 中国・四国・九州・沖縄」「朝日ビジュアルシリーズ 日本遺産14 萩・津和野」など。



定価 600円 (本体571円+消費税29円)

四百年にわたる歴史の成層。市民が巧みに住みこなす萩のまちは、現代に生きる都市遺産である。  
この遺産から次の百年のまちづくりを考える「萩まちじゅう博物館」が描きだす未来都市、そこにあなたを誘う案内書。  
萩博物館開館記念出版。



萩まちじゅう博物館

20

4

萩

Vol ④

萩まちじゅう博物館

2004年10月1日 第1刷発行

著者 西山徳明

発行者 野村典児

発行所 有限責任中間法人 萩ものがたり

印刷 有限会社マンヤマ印刷

ものがたり

萩市立萩図書館



111557260